

「しもくす」。なんか熊楠みたい

高山宏

ローズマリー・ジャクソンのレジエンダーリーといつてよい『幻想文学』(一九八一)の邦訳になったというので、まずは慶賀である。

僕にとつては格別忘れ難い一冊。というのは一九八一年というのは僕の第一評論集『アリス狩り』が出た同じ年ということ、考えてみれば僕が個人的趣味で夢中になっていた『白鯨』も『不思議の国のアリス』も実は悉くが「幻想文学」というカテゴリーでくくられるものであり、時々他人から幻想文学の人とか呼ばれるたびに少々違和感があった自分

が一人の幻想文学ファンであることを教えられたのが、ローズマリー・ジャクソンのこの一冊だった。その後、下手糞に研鑽を積んでいっばしの幻想文学研究者としての仕事をし、ひとつつたつ下の世代の異界案内人として振舞えたという自負もないではないとしたら、本邦の幻想文学愛好家たちは高山宏を通り越して、実はローズマリー・ジャクソンに多大の学恩を負っているのである。知らぬ間に……

と言いたいところだが、一九八〇年代に

限って言えば幻想文学研究の一大ブームが生じて、もういいやという類書汗牛充棟状態で些か食傷気味だった趨勢の中でも、無駄なくバランス良いという点で啓蒙書として第一級だったローズマリー・ジャクソンの本は水際立った一冊だったから、皆読んでいた。全巻人気のメシユエン社「ニュー・アクセント」叢書（ほとんど全巻耽読の人間も少なくなかった超人気批評書シリーズ）の中でもとびきりの一冊ということで、すぐに誰か邦訳するものと思っていた。

が、「一九八八年時点」に幻想文学マニアを名乗る人間ならこれくらい読んでかなきゃという脅迫めいた案内をやった自分の文章を今読んでびつくりするが、こんな名著が未だに邦訳がないのはどうしたことかと書いてい

る。百四十冊ほどの名著好著をコメンタリー付きで紹介したのだが、知らぬ者なきジャック・サリヴァン編の『幻想文学大事典』と並ぶものとして絶讃している。じゃあ、八十年代に狂気じみているとして敬遠されたペースで英米の批評書を片はしから邦訳していたお前が何故それほどまで入れこんだ一冊を訳さなかつたのかと問われそうだが、分野は幻想文学とノンセンス文学と少しちがいはするが、目配り良い批評ということではローズマリー・ジャクソンにほぼ匹敵するスーザン・スチュワートの『ノンセンス』という超難物の邦訳に振り回されて、じりじりしながら徒労の時間を過ごしてしまっていた。幻想文学とノンセンスと来ればもうひとつ同系列のテーマにパラドックス文学があり、そちらの

究極作、ロザリー・L・コリー『パラドクシ
ア・エピソード』は何とか邦訳できたが、コ
リーに献げられたスチュワートの大著は（原
理的に）邦訳不能と判明して中途放棄のまま
だ。相似る分野それぞれの理論的究極書とし
て、コリー、スチュワート、そしてローズマ
リー・ジャクスンを考えていた時期がたしか
にあつたらしいことが今回この一文を草しな
がら改めてよくわかった。狭い分野相手だが、
実はもの凄い本なのだ。

『超人 高山宏の作り方』（二〇〇七）に、
そろそろ人生の終りが見えてきてみて、訳し
損ねた百冊とか言つて名著の名を恋々とリス
トにした未練がましい文章がいろいろ話題に
なつたが、その中にもローズマリー・ジャク
スンの名作の名はない。二〇〇四年から十年

ほど、考えてみると僕はバーバラ・スタフォ
ードの翻訳紹介に命をはつていたように思う。
言つてみれば幻想文学に発して幻想文化論の
方に戦線拡大、というか逸れていつてしまつ
たのかと思われる。

下楠昌哉氏のおかげで、一時代を画したはず
なのに忘れられてしまう一著が見事に救わ
れた。それを引きだしたかのように見える殿
下こと東雅夫氏にも、今さらながら君ら凄
いと御礼と御祝いを申しあげたい。アモルフ
に展開する企画（「幻想と怪奇の英文学」の中
に一冊、翻訳もの丸ごと一冊を入れるといつ
た、とてもマニエリスティックな企画力を持
つ下楠氏には文芸「企画人」として強い親近
感と今後の展開への期待を感じてどきどきし
ている。